

内外交差点

人を生かすキャパのある業界

新しい観光タクシーコースへの挑戦(後編)

森田 玲子氏 (姫路タクシー社長) 第12/12回

昼下がりの陽光が眩しい。

待ち焦がれた春。

日本の美の原点は季節の移ろいにあると思うのだが、近年では情緒を置き去りにしたような気候変動が見受けられ、少し寂しい。それでも袴姿の学生や真新しいスーツ姿の若者を見かけると、確かな春の訪れを感じる。希望に満ち溢れ、少しの不安さえも未来の彩りに変わる彼らの姿を見ていると「よし、私も頑張ろう」と言う気持ちになる。2月に大学生の実習を受け入れたこともあり、学生をより身近に感じるようになったからかもしれない。

今回、うちに来てくれた大学生は大半の7名が大学1年生であった。ついこの間まで高校生だった女の子たちである。座学や見学の後に観光タクシーのコース作りを課題としたのだが、その発表内容は優秀な即戦力として遜色ないものであった。あるいは実際に現在取り組んでいる事例をより利用者目線で深めたりもしていて舌を巻いた。コミュニケーション能力が高だけでなくモノを創り上げていく能力にも秀でている。

1990年代、自身の大学時代と比べるとどうだろう。まず今の学生はよく将来のことを考えている、そしてかなりしっかりしている。高校生の頃から就職のことを考えているし、学校でもそれを念頭においた進路指導をしている。私など古典の授業で学んだ源氏物語が好きになり、もっと読みたいという理由だけで文学部国文学科を志望し失敗、たまたま合格していた法学部に進学するという行き当たりばったりぶりである。大学を卒業しても就職はせず程なく結婚。こんな学生はもうほとんどいないであろう。

確かに彼らは優秀である、これは間違いない。

それはそうなのだが、一つ大きな理由に気付いた。彼らに与えられた「タクシー」というフィールドに魅力と包容力があるから存分に力が発揮できたのではないかと。タクシーの専門的な知識が殆どない大学生が、来て1週間で即戦力と評価を得られる現場はなかなかないだろう。これほどキャパシティの大きな業界はそうそう見当たらない。

こちらの紙面では、現在姫路タクシーが最も力を入れている観光について語ることが多かったが、タクシーの大方の仕事は日常の欠かせない働きであり、通常はクローズアップされることのない地味なものである。

タクシーが仕事として社会的に注目されたのはコロナの 때가挙げられる。それは「エッセンシャルワーカー」という言葉と共に認識されるようになった。

コロナが蔓延し始めた頃、我が社に兵庫県からコロナ罹患者の輸送を引き受けてほしいという依頼があったが、正直迷った。やはり怖かった。そのような時、私には一つの判断基準がある。自分ならできるかどうか、あるいは自分の息子にさせることができるかどうか、というものである。私はそのどちらの点からも無理と判断して県に対し丁寧にお断りした。そしてその話をたまたま開催された組合との団体交渉時に伝えたのだが、彼らは「なんでそんな断ったんですか。誰かが行かなあかんのでしょうか。それなら俺らが行きます」と言ってくれた。あるドライバーの奥様は、看護師として日夜コロナ患者と向き合っていた。奥様にうつす可能性を少しでも減らすために、彼は外れた方が良いでしょうと私が言うと「社長、それは逆です。嫁が頑張ってるから自分もここで頑張りたいんです」と言われた。

私は心底己を恥じた。

守ることしか考えていなかった経営者の自分と、輸送という仕事を至上のものとして世の中の役に立とうと危険を顧みないドライバー。なんと卑怯なつまらない私であろう。と同時に、こんなに心強い仲間と仕事ができることに感激した。なんと素晴らしい心もちで仕事をしているのだろう。

コロナで多くの富を失ったが、そんなことはどうでも良くなった瞬間であった。人こそ宝である。人に仕事は集まる。彼らがその能力を伸ばせる環境を整えるのが私の使命であると再認識した。優秀な人材がシェアを伸ばせる場所にしか優秀な人材は集まらないのだ。その能力を存分に発揮できる場として観光タクシーを位置付けたところ「タクシーで観光の仕事がしたい」という動機で入社してくれる人が後を断たない。今後もそのフィールドを広げていきたい。

